

受賞者：櫛池農業振興会 （新潟県上越市清里区）
（旧：櫛池地区農業振興会）

天皇杯
受賞年：平成20年



むらづくりの経緯

- ・高齢化・過疎化が進行し、集落機能の低下が懸念される中、地区内の11集落と隣接する1集落で、平成17年の中山間地域等直接支払制度の実施を契機として、農作業を主体とした協力体制を構築する。
- ・平成18年度に「櫛池地区農業振興会」を発足させ、集落の広域連携を推進し、継続的な活性化に取り組み、「地区内の全集落を一つ」にした地域活動を展開している。（※現在は、「櫛池農業振興会」と名称を改称。振興会傘下の農業6法人を中心とした営農を展開。）
- ・平成27年度から、「農村集落活性化支援事業」を活用し、農産物の販売促進や、都市と地区の交流等の取組（農観連携）を進めた。（H27～H31：5カ年）
- ・令和3年度から、新潟県事業「ビレッジプラン2030」を活用し、「清里地区将来プラン」を作成した。（令和5年度末）（R3～R7：5ヶ年）
- ・「ビレッジプラン2030」で作成した「将来プラン」を具現化するため、農林水産省事業「農村型地域運営組織（農村RMO）形成推進事業」に取り組み、まずは、地域を運営する体制づくりを進めている。（R5～R7：3か年）

受賞当時

生産活動の特色

- 櫛池地区は、上越市清里区（旧清里村）の中において最も山間部に位置し、櫛池川の両岸に散在する11集落で形成する中山間地域である。
- 地形的に不利とされる条件を克服し、中山間地域の資源や豊かな景観等の多面的機能を活用しつつ、都市との交流を積極的に進めてきている。
- 櫛池地区の農家が労働不足を補える体制を整備
- 農業の法人化、農作業の合理化、徹底した生産コストの低減
J-GAPの取得（水稻）
- 販売促進
農産物等庭先集荷サービス（農産物の宅配）
- 棚田の標高差を利用した作物栽培 等



地域づくりの特色

- 櫛池地区は、肥沃な農地と豊かな自然環境を主体とした、標高差30～490mに広がる水田は、棚田としての景観を擁している。
- 櫛池地区が一つになって
農地（棚田）・農家・集落・地区を守る体制、地域活動の展開
- 集落や農地の維持
雪下ろし支援、高齢者等の送迎、地区内の農業法人による自力農地整備（直営施工）、農地保全ボランティアの受け入れ 等
- 都市農村交流
農作業体験、星（隕石）やホテル等の地域資源を活用 等

～受賞直後の効果～

- ・H21～農業法人の設立や補助事業の導入
- ・地域に根付いた体制と、地域活動により集落に賑わいが創出
- ・住民の安全・安心な暮らしが維持される。
- ・H23都市農村交流の開始（体験等受入）
- ・H24庭先集荷サービス、農産物加工品の生産販売、宅配販売により、所得が向上し、地域が活性化
- ・中心的な農業法人（有限会社グリーンファーム清里）が天皇杯を受賞（H29農産・畜産部門）
- ・H30振興会を「一般社団法人」に移行

- ・H30清里農業公社が中心となり、地区の農業法人等が連携して地域と農業を守る方向性を示した「清里一農場化計画」を提唱
- ・R4特定地域づくり事業協同組合「星の清里協同組合」を設立し派遣事業を開始
- ・R5振興会が主体となり農村RMO形成推進事業の取組を開始

現在

評価ポイントの取組状況

- 中山間地域等直接支払交付金対象面積
（203ha（H18）→217ha（R5））
- 地区で作成した「櫛池地区将来ビジョン」並びに「清里一農場化計画」のもと、新たに2つの法人設立を支援（H31、R2に設立）
- 上越市櫛池地区指定棚田地域振興協議会を設立し棚田の保全事業に取組（R2）
- ・荒廃農地再生事業としてワラビ、ソバ（R元～）とコシアブラ（R4～）の栽培に着手
- 特定地域づくり事業協同組合「星の清里協同組合」では職員2名を農業法人に派遣（R5現在）
- 「農育連携」をテーマに、農業や交流活動を通じて、子ども達と一体で地域づくりを進める、農村RMOの設立に向けた取組を開始（R5～）
- ほ場整備事業の取組（2地区：50ha）
- 雪下ろし支援グループ
「星のふるさと支え隊」（構成員23人）



今後の展開

- 農業者の高齢化・離農等が急速に進行した事に対応して、組織化された「若い担い手」を確保（バトンタッチ）する。
- 振興会を新たな農村RMOの中心組織として機能強化を図る
- 地区内にある未整備水田の保存に取り組む 等

受賞者：田沢湖牛銘柄確立推進組合

(秋田県仙北市田沢湖)

内閣総理大臣賞
受賞年：平成20年



むらづくりの経緯

- 神代地区では、昭和30年代後半から堆肥を利用した米生産が行われ、昭和54年頃から本格的に有機米栽培の取組を開始。和牛農家の天日干しの米として売り出し、昭和60年頃には「神代有機米(後に”じゃんご米”とネーミング)」として全国から引き合いが殺到。
- 生産責任を明確にするとともに、流通業者・消費者との交流を図るため、地区内の農家40戸が「神代有機米生産研究会」を設立。このメンバーが主体となり、地域の肉用牛振興と堆肥の安定供給、さらには地域農業の活性化に向けてどうすべきか等の話し合いを重ねていった。
- 平成9年には、生産者のみならず、消費者も組合員として集結し、農産物の生産・流通・消費を包括した組織「田沢湖牛銘柄確立推進組合(モートピア神代)」が設立された。

受賞当時

生産活動の特色

- 2棟の牛舎で繁殖経営を営むとともに、地元から素牛を導入することで和牛振興を図っている。
- 地域の後継者育成を図るため、農家に牛舎を公開しているほか、研修の受入れやヘルパーの派遣等にも取り組んでいる。
- 高品質な堆肥を生産し、農家に有償で提供することで、じゃんご米生産の基礎となる土作りに貢献。複合作物農家にも堆肥を提供するなど、地域の堆肥供給を一手に引き受けている。

地域づくりの特色

- 生産者と消費者との交流の輪をさらに広げようと、「じゃんご倶楽部」を発足。地域農業の活性化等の活動に賛同者が集まり、会員数は545名まで増加。新米まつりや地元蔵元の蔵開きへの招待など、多彩な活動が行われている。
- 神代の和牛生産を身近に感じてもらえるよう、和牛のオーナー制度を実施し、生産者と消費者の絆を育んでいる。
- ありのままの農村や農家と触れあうことのできる「現地交流会」を開催。準備・運営は、理念に賛同した地域住民が総出で参加することにより支えられている。

～受賞直後の効果～

- ・都市との交流が活発化
- ・関東方面からじゃんご米の引き合いが増加

現在

評価ポイントの取組状況

- 組合は平成25年に解散したが、構成メンバーが「農事組合法人藤村農場」を同年2月に立ち上げ、組合の事業(施設含む)を承継。法人の代表理事は神代有機米生産研究会の副会長も兼務している。
- 平成28年に牛舎を改築し、飼養頭数は50頭前後となっており、ゆとりのある環境で繁殖牛の飼育が行われている。
- 牛舎で生産されるたい肥は、地域の農家へ継続して提供しており、地域内循環農業の一翼を担っている。
- 神代有機米研究会と首都圏(千葉・静岡)の消費者や米穀店の方と交流が継続しており、農作業体験(除草作業)や市のまつりに参加したり、研究会メンバーが直接出向いて「じゃんご米」を販売している。

今後の展開

- 肉用牛については、飼養規模の拡大に加え、研修の受入れによる後継者育成や地域雇用者の確保等に引き続き取り組んでいく。
- じゃんご米については、神代有機米生産研究会と連携し、都市消費者との交流等を行いながら、ブランド確立や需要拡大につながる取組を進めていく。

受賞者：かわちの
川内野集落

(佐賀県伊万里市)

日本農林漁業振興会会長賞
受賞年：平成20年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

- ・川内野地区は、佐賀県の最西端に位置し、長崎県と隣接する中山間地域。若者の農業離れや担い手の高齢化が進み、川内野集落の活力の低下に危機感を募らせた青年農業後継者がH6年にむらづくりグループ「コメCOME倶楽部」を結成し、H8年から古代米「黒米」の栽培を開始。
- ・これが契機となり、集落内のむらづくりの機運が高まり、若者の定住を目指すむらづくりの目標を策定し、集落の婦人会、老人会、子供会等の組織がそれぞれ役割を担い、自主的なむらづくり活動を展開。

受賞当時

生産活動の特色

- コメCOME倶楽部は、川内野にしかない農産物づくり、むらづくりのキーワードとして黒米の栽培に取り組み、試行錯誤を重ねて栽培技術等を確立。栽培面積は着手時H8年の10aからH20年には約3haまで拡大。
- 女性グループ「夢耕房農産物加工グループ」は黒米味噌等の数多くの黒米の加工・商品化を実施。
- H11年に「夢耕房たきの」が建設され、ここを拠点に農産加工の開発、竹細工等の伝統工芸の継承などを推進。

地域づくりの特色

- 地元農産物、加工品、竹細工等を販売し、黒米だご汁を提供する「夢の市」、地元食材を生産現場で味わう「畑の中のレストラン」、地区内外の子ども達を対象とした「農業体験スクール」など都市住民との交流イベントを地区住民が一体となって取り組み、黒米と川内野地区をアピール。
- 地域資源の「山ノ寺遺跡」や伝統芸能「浮立」の保存会は世代間交流を通じて、次世代への保存・継承に取り組んでいる。



黒米と黒米加工品



畑の中のレストラン

現在

評価ポイントの取組状況

- コメCOME倶楽部は、集落内の活動母体となっている。数年前から地元の大学と連携し、「イノピカプロジェクト」を開始。コキアの植栽や鳥獣害対策として集落内に設置しているワイヤーメッシュを使った棚田でのイルミネーション、田んぼのコンサートなど新型コロナを逆手に新たな手法で交流人口を増加させている。
- 集落内の地域おこし協力隊が、距離がある直売所まで、高齢のため車で搬入できない農家を対象に集荷を行い、搬入をすることで、農産物を販売することができ、休耕地の減少や新たな野菜作付、生きがいづくりに繋がっている。
- 6次産業化に取り組む農業者は、川内野集落の特産である「黒米」を活かしたうどん、パスタ、羊羹、せんべい等加工品を開発しており、地域のPRに一役買っている。
- アフターコロナにおいて、農家民泊では、修学旅行生の受け入れが再開され、体験メニューの「草木染」や「黒米いなりずし」は特徴ある体験として大好評である。
- 地域資源の「山ノ寺遺跡」には史跡の案内板を設置し後世に分かりやすく伝える工夫を行い、「浮立」は、大人から若者世代へと着実に伝承されている。



夜間交流イベント



コキア



農家民泊

今後の展開

- イノピカプロジェクトの継続により、中山間地域農業を維持・発展するための6次産業化、都市部からの農泊の受け入れや農業体験などによる交流人口や関係人口のさらなる増大を図る。
- 地域おこし協力隊の取組を自走していくことで継続を図る。